

看護専門学校における社会人学生を含むグループと 現役生のグループ学習の特徴（第二報）

小此木 百合香

元 目白大学 看護学部看護学科

Characteristics of Group Learning of Group including Active Student at Nursing Vocational School and Active Student Group 2nd Report

Okonogi Yurika

ex-Department of Nursing, Faculty of Nursing, Mejiro University

Abstract : [Aim] This investigation will clarify the characteristics of group learning from the discussion processes of a group that included adult students and a group of current students.

[Method] I carried out quantitative and descriptive analyses on statements that were made by the group that included adult students and the group of current students after their usual seminar on lifestyle support skills which is based on the participation-through-observation method (non-participative type).

[Results] The group discussions shared a common process, beginning with “orientation,” followed by “an exchange of opinions regarding the theme,” “an adjustment of opinions,” “a resumption of discussion,” “a clarification and sharing of learning tasks,” and then, “the achievement of the group learning goals.” Although “deviation from the theme” occurred within both groups during the “exchange of opinions regarding the theme” process, “nomination” in the discussion process and “speaker bias” could be seen in the group that included adult students.

[Conclusion] Although “speaker bias” occurred among the adult students, “nomination” encouraged the current students to make statements to improve and counteract the bias. This suggests that there is a necessity to support current students when they are in groups that include adult students so that they are able to make proactive statements.

Key Words : Adult students, Group learning

抄録 : [目的] 社会人学生を含むグループと現役生グループの討議過程からグループ学習の特徴を明らかにする。
[方法] 参加観察法（非参加型）による日常生活援助技術演習後の社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習中の発言内容を質的記述的に分析した。[結果] 共通して「方向づけ」で始まり、「テーマに沿った意見交換」「意見の調整」「討議の再開」「学習課題の明確化・共有」「グループ学習の目標達成」のプロセスでグループ討議されていた。「テーマに沿った意見交換」の過程で「テーマからの逸脱」は共通していたが、社会人学生を含むグループでは「発言者の偏り」や討議過程での「指名」がみられた。[結論] 社会人学生に「発言者の偏り」が生じていたが、同時に偏りを改善するための現役生の発言を促す「指名」をし、調整をしていた。社会人学生を含む学生グループの中でも現役生が主体的に発言できるような支援の必要性が示唆された。

キーワード : 社会人学生、グループ学習

1. はじめに

看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針によると、看護教員は現役生とは異なる背景を持つ社会人学生の長所を引き出し、短所を補うために、教育力・指導力を高めていくことが、今後ますます求められている（厚生労働省、2015）現状がある。

第一報では、看護専門学校における現役生とは異なる背景を持つ社会人学生を含むグループ学習の特徴を発言内容から明らかにした。その結果、社会人学生を含むグループと現役生グループに共通して演習体験での気づきやこれまでの学習方法・内容の見直しの必要性を共有していた。一方、社会人学生を含むグループの特徴は、社会人経験を活用した助言が行われていた。そこで今回は討議過程に着目し、どのような討議が行われ展開されているか、社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習の特徴を考察する。

2. 研究目的

グループ学習中の発言内容を分析し、社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習の特徴を討議過程に着目し、明らかにする。

3. 用語の定義

(1) 現役生

高校卒業後、即入学した者。

(2) 社会人学生

高校あるいは短大・大学等を卒業後、なんらかの就業経験を持ち、入学した者。

4. 研究方法

(1) 研究デザイン

質的記述的研究

(2) 対象

看護専門学校（全日制3年課程）3校の1年生、社会人学生（3名）を含むグループと現役生グループ各3グループ、計6グループ。現役生32名、社会人学生9名、合計41名。

(3) データ収集方法

平成26年5月21日から7月23日の3校のグルー

プ学習時間に参加観察法（非参加型）にてグループ学習での発言内容をICレコーダーに録音した。

(4) 発言内容の分析方法

- (a) 社会人学生を含むグループと現役生グループごとにICレコーダーに録音された発言内容から発言表を作成した。
- (b) グループごとの発言表を精読し、発言内容のまとまりを作り、意味内容を損なわないように、まとまりごとに命名した。
- (c) グループ討議の変化が生じた発言内容を抽出し、グループメンバーの誰による発言なのか、確認した。
- (d) データ分析過程において、看護教育実践者からスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

本研究計画は獨協医科大学看護学研究倫理委員会の審査の承認（承認番号：看護25013）を得た。実施に当たっては研究協力校および研究協力者に口頭と文書で説明し、同意を得た。

6. 結果

社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習過程を図示化した。以下、グループ学習中の現役生の発言内容を「 」、社会人学生の発言内容を『 』で表した。

(a) 社会人学生を含むグループのグループ学習過程

社会人学生がリーダーになり、運営に関するテーマと方法を確認し、『順番じゃなくて、いいんですよ？』『じゃあ、書記さんがメンバーを書き終わったら始めようか。』『じゃあ3番、言います。』など、メンバーの合意を得ていた。『何、話すんだっけ？』『これでしょ。』『番号順で行く？』『じゃあ番号順に。』『1番さんからじゃない？』など、リーダーは、他の社会人学生から助けを得て、討議を開始していた。討議開始後、「うーん、体位変換ですよ。けっこう力を入れないと患者さんを動かすのに大変だなんて思いました。』『看護師役やって、まあ、練習だから力、入れてくれるから、実際の患者さんになると、絶対に重いなあ…みたいなのがあって、…後略…』などの発言があり、〈手技の難しさを実感〉し、患者をイメージしたことでケアへの漠然とした不安を抱

いた。社会人学生は、『女の人は髪の毛が長かったりとかするから、今日は患者役でも帽子かぶったままだったけど、…後略…』など、演習場面を想起して、『今日の感覚ではとにかく現場では絶対できないし、…後略…』など、職業経験を活用した助言をしていた。

リーダーが次のテーマを提示し、メンバーから、〈援助を受けなければならない患者の気兼ね〉〈援助を受けなければならない患者の我慢〉など、患者役体験で気づいた患者の気兼ねや苦痛について、発言が得られた。また、〈遠慮や気兼ねを考慮した援助〉〈自尊感情を低下させない援助方法の提案〉〈患者の立場に立った援助方法の提案〉など、患者心理をふまえた援助の必要性を述べていた。社会人学生に発言が偏り、『あと、何話し合ったらいいかなあ。現役の人の意見も聞きたいなあ。』『やっぱ一回、仕事してたメンツだとそういう感じになってくるけど、現役はどんな風に思ったのかな？』など、現役生の発言を促していた。意見交換が進むが、『…前略…出産経験しちゃうと恥ずかしさもなにもない。なんでもやれちゃうから。』を機に、テーマから逸脱がみられた。そのため、『今日のテーマとなくなっちゃったけど、なんか。』『これまでの話を聞いて、自己の課題ってなんだろう？』など、リーダーに限らず、社会人学生が討議の修正をしていた。

また、『みなさん、言っていたのは患者のことを考えるようになったことです。これが大きいかなって思います。あとは自分の身体のことかな。看護師役から出たのは、おおまかに2つです。患者（役）をやってみてっていうのは、みんな自分、元気だから、自分から動いちゃって、気を遣っちゃうってことが多かったけども、あとは恥ずかしかったとか、患者も気を遣っているんだなってことですかね。このへんとかを中心にもとめたらいいかなと思うんですけど、どうでしょう？』など、リーダーはこれまでの意見をまとめながら、今後の学習課題の明確化・共有に向け、メンバーに投げかけていた。

(b) 現役生グループのグループ学習過程

グループ学習開始まもなく、リーダーの「何番からにする？」「じゃんけんで負けた人からにする？」「挙手にする？」など、発表方法が定まらないことか

ら、リーダーが運営に関するテーマと方法の提示をするが、合意までに時間を要した討議の開始となった。

リーダーによる指名にて討議開始後、「その、車椅子と自分たちが立っている位置の距離感っていうのが、つかめなかった。」「沈めてさ、下に入れるって言ってもさ、そんなに沈まないじゃない。だから結構、ぐいってなるよね。」など、手技の難しさを実感し、一連の動作に戸惑い、技術の未熟さに気づいた。看護師役体験での気づきを共有し、「…前略…これが本当の患者だったら、すごい難しい…後略…」 「実際、本当の患者さんだったら、どうなっちゃうんだろうなって、怖い部分もあって。」「本物（の患者）だったらね、こんなぐりぐりなんかしたら絶対、言われるよね。」「…前略…今まで練習してきたように絶対できないと思うんだよね。」など、演習体験を振り返り、実際の患者を想定し、ケアへの不安を抱いた。

リーダーが次のテーマを提示し、「患者さんは自分が思ってるよりも、受身？で多分、消極的だと思うので、言いたいことも言いづらいんだなあと思いました。」「やっぱりさ、なんか患者さんがなかなか言えないでさ、なんかぎりぎりまで我慢しちゃう。」など、援助を受けなければならない患者が抱く気兼ねや我慢に気づいた。患者の心情を理解し、「私はなんかこの前の実習とかやってみて、わかってあげられる？なんか看護師になったら、トイレしたいんですけど患者さんが、ちゃんと言い易いような看護師になれるようにこまめに声をかけて、トイレって頼んでもらえるようにしたいなって思いました。」など、患者心理をふまえた援助の必要性に気づいた。

看護師役・患者役体験での気づきから、「小っちゃいときって点滴、腕じゃとれないって、足の甲にさせてくれて先生に言われたの。したのにもれちゃって。…後略…」を機に、グループ学習のテーマから逸脱していった。その後、「意見、言える人、いますか？」と、リーダーによる討議の修正が図られた。

体験で得られた情報の共有をふまえ、「…前略…何回も何回もやって技術が身につくから、何回でも練習することは大切だなって。」「…前略…練習の内容を振り返って、実際にこう直した方がいいよって

明確にすることに、意味があると思うので…後略…」など、演習取り組み姿勢の見直しがされていたが、時間不足も加わり、十分に意見のまとめがされていなかった。

7. 考察

社会人学生を含むグループと現役生グループに共通したのは、テーマから逸脱であった。テーマから逸脱した際、現役生グループは、リーダーが討議の修正を図り、リーダーシップを発揮していた。社会人学生を含むグループは、リーダーに限らず、社会人学生が討議の修正を図っており、これまでの社会経験を反映したリーダーシップが発揮（渡邊他，2013）されたと考えられる。また、グループ学習は、グループメンバーの対人関係が良好で発言をすることにより、発言頻度が増加（出口，2001）することから、今回のグループ学習において、テーマから逸脱につながったのではないかと考えられる。グループ学習中、学生がどれほど熱心に討議を展開し、主体的学習を行っていても、その内容がグループ学習の目標から逸脱していたり、誤りが生じていた場合、それを修正することは教員の重要な役割である（芳我他，2007）ため、グループ学習におけるファシリテーター役割の重要性を確認した。これらのことから、グループ編成にかかわらず、グループ学習中、テーマから逸脱がみられることを予測し、効果的なグループ学習に転換できるよう、教員は教育方法を検討しておく必要性が示唆された。

教員はグループ学習過程において、能動的に関わることが難しい現状はあるが、リーダーが運営に関するテーマや方法をメンバーに提示し、方向付けがスムーズに進んでいるか、テーマに沿った意見交換がされているか、グループ間巡回を行い、短時間でもグループに留まり、グループ学習の進行状況を把握する必要がある。また、教員は、グループ学習終了後、グループ全体でどのようにコミュニケーションを図り、グループダイナミクスが働いたのか、グループにどのように働きかけたのか、教員を活用できたのかなど、グループメンバー間の自己評価・他者評価を継続的に行うことで、グループ学習過程をとらえる必要性が示唆された。

看護教員は、社会人学生に対する関わり方として、演習場面では、背景が異なる者を混合させて社会人学生が偏らないグループ編成にするなど、グループ活動を活性化する工夫をしている（渡邊他，2013）。また、授業や実習のグループメンバー編成に社会人学生を分散して配置する調整について、社会人学生の主体的な学習姿勢やコミュニケーションスキルをグループ学習のなかで発揮してもらえという（看護教員の）期待が考えられる（渡邊他，2014）。しかし、社会人学生は、年齢差や社会経験の違いはあっても、現役生と同じ基礎看護を学んでいる学生として指導してほしいと感じている（前田，2004）ことや社会経験があっても、看護の初学者であることは現役生と何ら変わりはない。今回、社会人学生を含むグループは社会人学生がリーダー役割を果たしていたが、社会人学生・現役生にかかわらず、メンバーは順にリーダーを担い、リーダー役割を果たしていくことが必要である。また、教員は、グループ学習における学習効果を高めるために、社会人学生の年齢・就業経験に固執することがないように注意し、学習内容に即した経験を引き出すような関わりが必要である。

以上のことから、これまでのメンバー編成の基本である小集団間同質・小集団内異質（村本，2001）に加え、グループ学習における多様な背景を持つ社会人学生の配置について、年齢・性別、これまでの社会経験、さらに個人特性を考慮し、グループ編成をする必要性が示唆された。

8. 研究の限界と今後の課題

今回協力を得られたのは3校であり、対象者は1年生のため、看護専門学校（全日制3年課程）における学生全てにあてはまることではない。しかし、グループ学習の経験が少ないと考えられる1年次、夏季休暇前に時期を限定し、データ収集をしたことで、社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習過程を把握することができた。協力を得た社会人学生の年齢は20～30歳代、就学状況も異なり、出産経験について発言していた学生もおり、社会人学生の規定を明確にし、さらに対象者を増やし、社会人学生が増加する看護専門学校におけるグループ学習支援について、探究していくことが今後

の課題である。

9. 結論

看護専門学校における社会人学生を含むグループと現役生グループのグループ学習中の発言内容を討議過程に着目し、分析した結果、以下のことが明らかになった。

- ①社会人学生を含むグループのグループ学習過程は、社会人学生がリーダーとなり、他の社会人学生の協力を得て、グループ学習の方向付けを行い、合意を得ていた。テーマに沿った意見交換では、看護師役体験での気づきから、実際の患者を想定したケアへの不安を抱いたメンバーに対して、社会人学生の介入があり、ケアへの不安は解決され、リーダーによる意見のまとめ、学習課題の明確化が図られていた。
- ②現役生グループのグループ学習過程は、リーダーがグループ学習の方向付けをするが、すぐに合意が得られなかった。テーマに沿った意見交換では、看護師役体験での気づきから、実際の患者を想定したケアへの不安を抱いたが、メンバーによる解決が十分にされず、意見のまとめに向かい、曖昧な学習課題が残っていた。
- ③グループ学習過程におけるテーマから逸脱は、社会人学生を含むグループと現役生グループに共通してみられた。
- ④討議の修正は、現役生グループはリーダーが行い、社会人学生を含むグループはリーダーに限らず、社会人学生が行い、社会人学生は現役生の発言を促していた。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

本研究は、2014年度獨協医科大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

なお、本研究は第36回日本看護科学学会学術集会において発表した。

図1 社会人学生を含むグループの学習過程

図2 現役生グループの学習過程

引用文献

- ・出口拓彦（2001）。グループ討議における相互作用とグループの構造・構成との関連－成員の対人関係に注目して－、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学、48、17-28。
- ・芳我ちより・舟島なをみ（2007）。学生間討議を中心としたグループ学習における教授活動の解明－看護基礎教育において展開される授業に焦点をあてて－、看護教育学研究、16（1）、15-28。
- ・厚生労働省（2015- 3-10.）。看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針。http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/。
- ・厚生労働省（2013- 9-10.）。平成25年版厚生労働白書－若者の意識を探る－。http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/。
- ・厚生労働省（2012-2-28.）。看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200001316y.html。
- ・厚生労働省（2003-3-17.）。看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書。http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html。
- ・前田幹香（2004）。社会人経験を持つ看護学生の学校生活に関する認知の特性、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録、29、123-129。
- ・村本淳子（2001）。グループ学習、高島尚美、わかる授業をつくる看護教育技法2 討議法を取り入れた学習法、166、医学書院、東京。
- ・中村和代・石井知子・牧香里（2005）。グループ編成がグループ学習の参加姿勢に及ぼす影響、看護教育、46（3）、232-235。
- ・西田絵美・勝眞久美子・上平悦子（2003）。看護専門学校に入学した大学卒業生の特徴－高校卒業生との比較を通して－、日本看護学会（看護教育）、34、112-114。
- ・西谷千恵（2003）。大卒社会人経験者が看護専修学校入学に至る経緯、日本看護学会（看護教育）、34、109-111。
- ・白井靖敏・鷲尾敦・下村勉（2013）。大学教育におけるグループ学習のファシリテーション効果、名古屋女子大学紀要、59、113-122。
- ・杉森みど里・舟島なをみ（2014）。看護教育学（第5版増補版）、216、医学書院、東京。
- ・総務省（2013-11-14.）。看護師等学校入学状況及び卒業生就業状況2013年度。http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000000yy8n-att/2r9852000000yy8n.pdf。
- ・渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝（2014）。看護専門学校（3年課程）における社会人経験のある学生に対する教育方法の現状分析、日本看護学会教育学会誌、25（1）、55-65。
- ・渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝（2013）。看護教員が認識する社会人経験のある学生の学習者としての特徴と教育の困難感、日本看護学会（看護教育）、43、106-109。

受付日：2018年3月10日

受理日：2018年4月27日

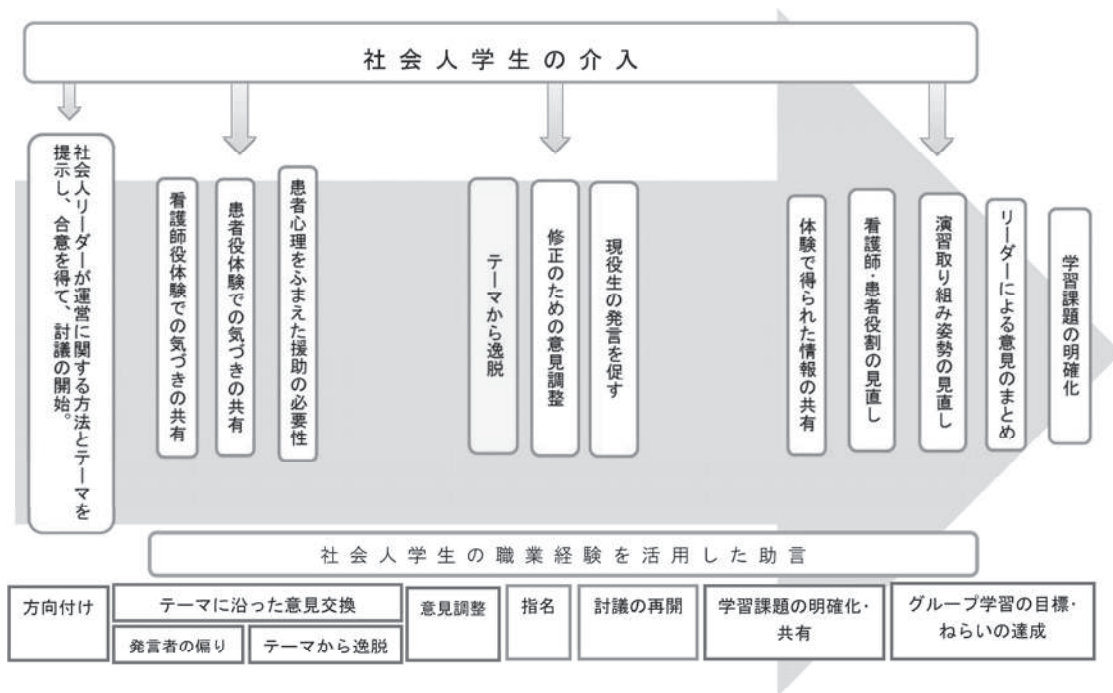


図1 社会人学生を含むグループの学習過程

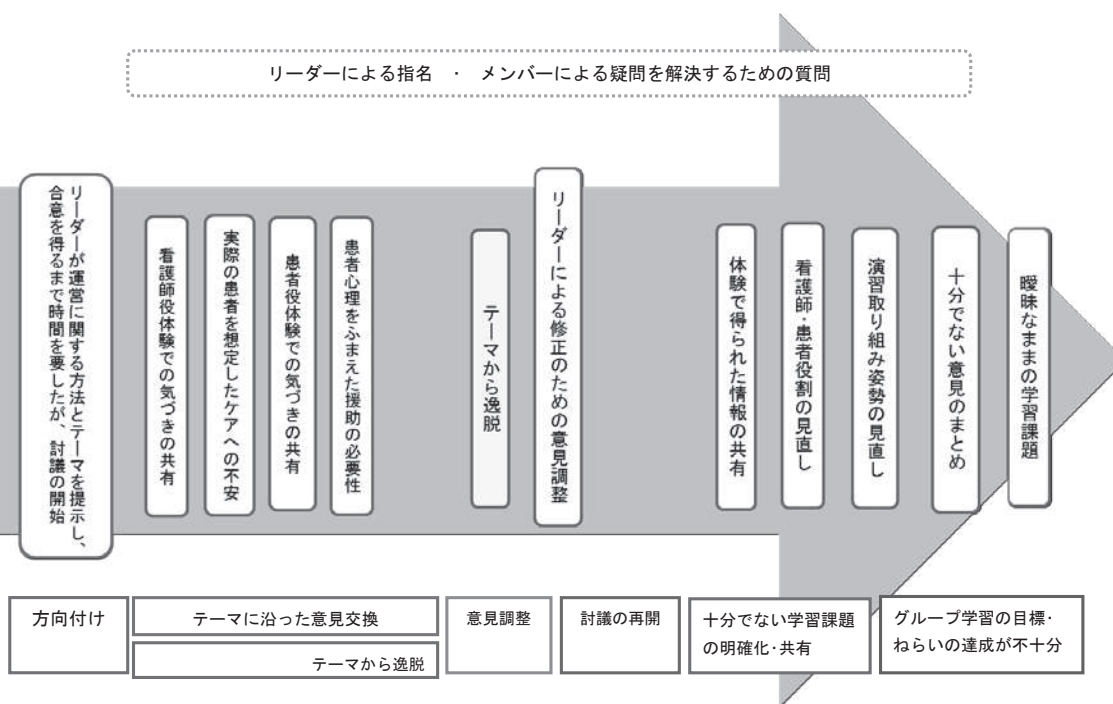


図2 現役生グループの学習過程